

情報技術をめぐる認識論の構図 ：記号論とネオ・サイバネティクスの交点

棕本 輔（デザイン事務所代表／立命館大学ほか）

発表要旨：

本発表では、情報技術をめぐる認識論的な理論研究について、これまでのアプローチと課題を確認し、その克服の方途を検討する。昨今では、大規模言語モデルを中心としたAI技術の飛躍的發展と急速な日常への普及により、情報技術システムの主体化や人間との異同をめぐる議論が改めて盛んである。しかし、人間のような／人間を超える知能として主体化されるか否かに関わらず、情報技術すなわち「情報」を主題とする技術は必然的に、我々人間の意味解釈や認識と不可分に存在している。情報技術のシステムは常に「人間と機械との複合系」として、詳述すれば「人間のコミュニケーションと機械システムとの複合系」として成立する。

そうした認識論的な観点での情報技術をめぐる理論研究は、近年まで様々なアプローチでなされている。理論的に特長有る例として、組織論的な情報システム研究に対して記号論を中心にシステム論も併用することで認識論の観点を加える試み（Mingers&Willcocks, 2023）や、認識論的なシステム論（ネオ・サイバネティクス）を中心に記号論も踏まえた「デザイン意味論」（Krippendorff, 2006=2009）における情報技術についての議論が存在する。

本発表ではそれらを比較検討した上で、情報技術をめぐる認識論的な研究が、理論的な性質の大きく異なる記号論とネオ・サイバネティクスとの交点となっていることの必然性について考察する。また、その交点における理論的な課題について、ネオ・サイバネティクスの中で特に情報概念・情報技術に関わる理論を深め、また生命記号論との理論的關係も検討されてきた基礎情報学の知見（棕本, 2019&2026）を援用することで、克服の方途を検討していく。

References:

John Mingers & Leslie P. Willcocks (2023) 『The Semiotics of Information Systems: A Research Methodology for the Digital Age』, Palgrave Macmillan

Klaus Krippendorff (2006=2009) 『The semantic turn: A new foundation for design (意味論的転回：デザインの新しい基礎理論)』, CRC Press=エスアイビー・アクセス

棕本輔 (2019) 「擬自律性はいかに生じるか」, 河島茂生(編著) 『AI時代の「自律性」：未来の礎となる概念を再構築する』, 勁草書房

棕本輔 (2026) 「ネオ・サイバネティクスに基づくデザイン論：コミュニケーションを通じた関係性の制御としてのデザイン」, 西田洋平(編著) 『システムとサイバネティクスの思想』, コロナ社

本発表の内容は、科学研究費助成研究（研究課題/領域番号：26K03397, 研究種目：基盤研究(C), 「言語生成AI時代における主体性概念の再考：情報学的主体概念の構築」）として進行中の研究による成果を含む